Top Interview

トップに聞く！

十八親和銀行

強みである特許技術を駆使し、日本全国の港湾インフラ整備に貢献する。

福丸建設（ふくまるけんせつ） 株式会社

代表取締役社長
増田（ますだ） 貴光（たかみつ） 氏

取引店／十八親和銀行 佐世保本店営業部

■会社概要

創業:1973年／**設立**:1976年／**所在地**:長崎県佐世保市／**資本金**:2,500万円／**従業員**:61名（2023年4月現在）／**事業内容**:砂岩浚渫工事、一般土木工事、内航運送業、港湾土木工事、とび・土工工事、船舶仲介、サルベージ工事、測量・設計・施工、クレーン作業

会社ホームページはこちらからどうぞ!

海底を掘削する浚渫船
「第22福丸」前
（左から増田社長、山川頭取）

海運事業で創業し
浚渫工事を軸に発展

当社の創業は1973年。私の父・増田福一が、佐世保で海運会社「福丸海運」をその年に起こしましたが、その福一が海運事業を起こしたのもまた、福一の父、つまり私の祖父・福蔵が故郷・五島の若松瀬戸の高仏という地域で造船会社と海運会社を営んでいたことがきっかけでした。

福蔵が経営する会社は、日本の高度成長期とも重なって、博多との交易が盛んになり五島・若松随一の会社となります。ところが会社の全財産ともいえる機材を載せた船舶が、港の防波堤に着岸しようとした瞬間、海中の突起物に衝突しすべてを失ってしまいました。福蔵の家族はそこから一気に貧しくなり、福一は五島での生活をあきらめて中学卒業と同時に佐世保へ移り住むことにしました。福一は佐世保で職を探し、リヤカーで鉄スクラップを集め、それを売って生計を立てつつこつこつ資金を貯めていました。そうしたある日、リヤカーを引いていると佐世保川の中に沈んだ船を見つけます。船を川から拾い上げ、まだ使えると判断すると、所有者を見つけ出して譲ってもらいました。その船に五島から焼玉エンジンという旧式エンジンを取り寄せて積み、船に「福丸」と名付けました。それが当社の社名の由来です。その福丸で海運業を始め、佐世保港と西彼杵半島の北西にある崎戸島との間で物資を運びました。今は長崎県内をはじめとして日本全国で企業活動を展開する当社ですが、創業までにはこうした苦労の積み重ねがあったのです。

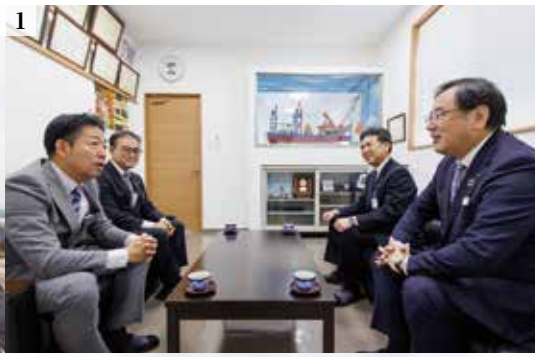
当社が港湾や河川の水底に積もった土砂などを取り除く浚渫事業に着手すると、佐世保港を拠点に長崎県内の商工業港、漁港、河川などでの浚渫工事が中心となりました。

当社が得意とする浚渫工事は、現在売上の80％近くを占めていますが、見えない水中を掘削するため、数ある土木工事のなかでも最高難度の技術が要求される工事とされています。具体的には、地質、地形に応じた施工機械の選定、気象・海象条件の把握、航行船舶への影響を最小限に抑えるための施工方法の検討といった総合的な判断が不可欠となるのです。

さらに、浚渫工事の生命線ともいわれるほど重要なのが、正確な水深計測です。たとえ施工面積が数万㎡にもおよぶ大規模工事であっても、許容される施工誤差がわずか20㎝という現場もあります。大型重機を装備した浚渫船を用いる浚渫工事自体は、見た目には大掛かりでダイナミックである一方、その裏では緻密な計算と卓越した技術が求められています。

5

3


1

6

4

2

必要に迫られて特許技術を開発
全国屈指の砕岩能力を誇る

河川、ダム、海域などで水底の土砂をすくって取り除く浚渫工事ですが、このような工事には必要とされる理由があります。

港湾や河川などでは、水流によって運ばれてきた土砂が少しずつ底に積もっていく動きが絶えず起きています。河川部では、浚渫によって川幅を拡げる、あるいは水深を深くすることで川の流れをスムーズにして、洪水による水害を防ぐ結果につながります。海域においては、浚渫工事によって航路や港湾部の水深を確保することで、座礁等の事故を防止します。また、柔らかい土砂を取り除けば、防波堤等の構造物の沈下を防ぐのに役立ちます。

そのうえ、浚渫によって取り除いた土砂は、空港造成などの埋め立て、漁礁などに再利用できるのです。

増田社長

それほど社会に不可欠な浚渫工事を、私たちは使命を感じながら佐世保の地で始めて、社業の柱として成長させてきたわけですが、あいにく佐世保周辺は、柔らかい土砂の下に固い岩盤もあるという場所が少なくありません。浚渫を効率よく進めるためには、砕岩技術も重要になるというわけです。

そこで、必要に迫られた当社では、従来品とは異なる道具を開発しました。岩盤へ打ち込んで砕く砕岩棒（さいがんぼう）の刃先を従来のものより鋭角にすると同時に、より平らな形に変えて、岩盤へ奥深く食い込んで大きく割れるよう改良しました。性能を向上させたことで、打ち込み時の振動を抑えつつ水の濁りも少なくなりました。これは当社の誇る特許技術となっています。

特許技術ではまだあります。水底から土砂をすくい上げるためのバケット（土砂などを掴み上げる部分）は、汚泥や有害物質の除去にも使われるため、密閉性が必要なのですが、水中へ沈めると浮力が働いて目標へうまく着地できない場合があります。当社では、独自の空気抜き機能をもたせて、密閉性を確保しつつ空気抜きや水抜きができるバケットを開発しました。

こうした技術開発と数々の施工実績が評価されて、現在では県外からも声をかけていただくようになり、日本全国に活動の場を拡げています。

11

9

7

10

8

1.対談風景／2.浚渫船「第22福丸」を見学／3.巨大な工事用ブイ／4.巨大なバケット／5.クレーンの操縦席／6.巨大な砕岩棒／7.特許技術の密閉式バケット／8.特許技術の砕岩棒／9.佐世保港三浦岸壁の改修工事（ジャケット製作）／10.東日本大震災後の復旧工事／11.企業メッセージ

本社前。前列左から片山管理部長、増田寿一専務、増田貴光社長、山川頭取、谷口佐世保本店営業部長（十八親和銀行）、岩崎佐世保本部長（十八親和銀行）

高度な独自技術を活かして震災後の港湾復旧に寄与

これまでの県外での活動でとくに印象に残っているのは、東日本大震災後の復旧工事です。被災した港湾部再建のため九州の建設会社としては1番初めに青森県の八戸漁港に向かいました。当社の岩盤破砕技術が買われて、いち早く現地からの要請があったためです。

その後も、岩手県釜石港のギネス登録されていたスーパー防波堤撤去工事や田老漁港、只出漁港、長部漁港、宮城県の石巻工業港、女川漁港、福島県の相馬港と、震災が発生した2011年から2014年まで復旧工事は続きました。

当社では砕岩・浚渫工事で、佐世保港を始め、神戸港や羽田空港D滑走路などの工事にも従事してきた経緯があり、日本各地へ赴いてさまざまな工事に携わりながら鍛えてきた機動力を震災復興にも役立てられたのではないかと思います。

私が父から社長を引き継いだのは2012年で、ちょうど震災復興のための工事に従事して東北各県へ赴き続けている時期でした。佐世保で生まれ育ち、広島の土木工事会社で5年間勤務した経験をもとに、当社に入社して営業課長を務めていた矢先、先代社長の健康上の理由から社長に就任する運びとなりました。営業課長から一気に社長へ、最初は苦労もありましたが、

入社以来長く作業船で勤務して身に付けた現場感覚は、社業と業界を深く広く知ることができていたことが、経営の舵をしっかりと切れる原動力になったと実感しています。

SDGs達成のための積極的な取り組み

当社では、31隻にのぼる保有船と特許技術を活かした浚渫工事以外にも、港湾土木、陸上土木を手がけており、さまざまな実績を積んでまいりました。たとえば、佐世保港の岸壁改修工事や長崎北地区広域漁場の整備工事、佐世保工業団地の造成工事、佐世保駅周辺や主要地方道の道路改良工事から市役所前広場整備、歩道橋整備、小学校校舎の解体工事にいたるまで、多くの方々の暮らしに関わる施設や建造物の整備に関わっています。

また当社は、国土交通省による「みなとSDGsパートナー登録制度」に登録されている企業でもあります。この制度は港湾事業者を対象としたSDGs達成への取り組みを支援する制度で、港湾事業者としての社会的使命を果たしていくとともに持続可能な社会の実現に貢献すべく活動を進めています。

たとえば、カーボンニュートラルの観点からCO_2の排出量を抑えるために作業船のエンジンや補助発電機の運転時間を短くする操業スタイルに切り替えたり、錆びやすい鉄製のボラード（船を繋留するために岸壁に設置する杭）の表面をステンレス製に切り替えて接触するロープの摩耗や劣化を防いだり、社屋にソーラーパネルを設置して太陽光発電で必要な電力をまかなう、といった取り組みをおこなっています。

さらには、土砂処分施設の増設などに関して、港湾事業の現場で上がる声をしかるべき行政機関に届ける提言活動にも力を入れ、実現しています。

未来（あした）のために今できる全力を

当社が掲げているスローガンは「未来（あした）のために今できる全力を」。先に挙げた「みなとSDGsパートナー」としての活動もその一環と言えますが、私たちは地域社会の一員として、次世代を担う人たちのためにできることを常に考えています。

長崎県は海岸線延長が4,203㎞と、北海道に次ぐ全国2位であり、さまざまな海洋資源が豊富で、潜在的な可能性をまだまだ多く秘めています。それゆえ、洋上風力発電や潮流発電といった再生可能エネルギーの導入ポテンシャルが高いとも言われています。

地域の未来を見据えて、社業を通じた人材育成、地域社会との連携による相互扶助の仕組みづくりにも力を注いでいく所存です。

■ インタビューを終えて

十八親和銀行　取締役頭取　**山川 信彦**

日本の高度経済成長期直後に佐世保で創業され、佐世保港を拠点に、全国の港や河川等の浚渫工事等に携われています。さらには建設分野にも軸足を移して、県内外で施工実績を積み重ねて、創業50周年を迎えられました。

砕岩と浚渫の特許技術によって高い評価を獲得した結果、現在では日本全国を舞台に活動を展開されています。東日本大震災後の復旧工事においても多大な貢献をされておられますが、次なる50年、100年企業を見据えて、ますます発展されることを願っています。